(8) 福祉科高校生が持つ高齢者のイメージ

川崎医療福祉大学大学院　医療福祉学専攻　修士課程　○小川　知晶
川崎医療福祉大学　医療福祉学科　　田口　豊郁

【要　旨】

【目的】

高齢者の福祉を充実するには，世代間の相互理解が重要であり，高齢社会における高齢者に対する社会的扶養は世代間の支持がなければ成立が難しいと言われている．しかし近年，核家族化の進行や若年労働力を中心とした人口移動，都市の住宅事情等により三世代の同居率が低下し，若い世代と高齢者とのふれあいの機会が減ってきている．そういった影響により高齢者と身近に接する機会の少ない若い世代は，表面的接触から高齢者をとらえるなど，メディアからの情報より高齢者のイメージをもつステレオタイプが多いといわれている．高校生が持つ高齢者のイメージを知ることにより，福祉教育に役立つ何らかの基礎資料が得られるのではと考える．

【方法】

A県・B県内の福祉科および普通科のある高等学校にて，介護福祉士受験取得を目指す高等学校福祉科の2年生75人，高等学校普通科の2年生301人に対して無記名自記式質問調査を行った．

【結果および考察】

対象者376人（普通科301人，福祉科75人）中，約60%の生徒が現在同居している・過去に同居していた・幼少期に同居していたと答え，約40%の生徒が，同居経験なしと答えた．高齢者問題への関心についての問では，とても関心があると答えたのは普通科の生徒16%に対し，福祉科の生徒は33%であった．高齢者問題への関心についての項目は福祉科の生徒の方が高いことがわかった．

普通科と福祉科生徒の持つ高齢者イメージに大きな差は見られなかった．一方，幼少期における高齢者との接触が高齢者イメージに影響を与えることや，高齢者との親密度得点が高いほど，高齢者イメージ得点が高いことが明らかになった．このことから高校生が高齢者との接触機会を積極的に持つことは，高齢者に対するプラスイメージを形成することにつながりやすいことがわかった．今後は生活経験の各項目と高齢者イメージを細かく解析するとともに，解析結果を基に高等学校における福祉教育の展開について考察・検討していく．